せない著書である.

（山崎　敬）

スミレに魅せられた植物写真家が，いくつかの外来品を含む150種類をカラー写真でまとめたものである．花の正面と側面および中心部の拡大写真を主体に，葉や花の変異まで含めて記録している．ほとんどの種類についている超拡大によるめしべの上・側・下面の映像は，おし葉ではもちろん見えず，生品ではおしべに囲まれて見落としてしまう大事な特徴をよく見せてくれ，たいへん啓発される．私もパンジーを学生に観察させたとき，柱頭の断面を作ったら，中が空洞でそこが本当の柱頭であることを知って驚いたことがある．ところどころに観察記事，文学，紀行文などが挿入され，読物としても役立つよう配慮されている．

（金井弘夫）

□薄葉　重：**虫こぶ入門**　251 pp. 八坂書房．￥2,400.

採集していれば，虫こぶや菌こぶに出会うことは少なくない．ヌルデやイスノキのゴールは，むしろその種類の特徴としてとりあげられるが，標本を作るときには虫こぶのような余計なものがついていると敬遠し勝ちである．菌こぶは植物関係者の研究対象となるが，虫こぶの方は植物の人間からはどちらかというと疎遠である．ヌルデの虫こぶを作るアブラムシが，チョウチンゴケの仲間を中間宿主にしていることを，おぼろげに知っている程度である．しかし，生物界の現象がたくさんの種類の相互関係で成立していることを思えば，植物の研究だから植物だけ見ていればよいとは言っていられなくなってきた．花と花粉媒介生物との関係は，近来研究者が増加しており，共進化という単語もゆきわたってきた．虫こぶを作る動物はアブラムシ，タマバエ，タマバチ，キジラミなど，昆虫を主体に多様であり，その複雑な生活史や集団生活における社会構造などが鋭意研究されている．本書はまとめにくい「虫こぶ学」を通覧し，興味を起こさせようと書かれたもので，自然観察の予備知識として知っておいたら有用なことがらがたくさん含まれている．第一章は「虫こぶの文化誌」で，古来から知られた虫こぶに関するトピックや利用のはなしが紹介される．第二章は「虫こぶの生物学」で，こぶの形成の仕組み，それにかかわる生物などが紹介されている．第三章は「虫こぶ観察ノートから」の表題で，著者の数々の体験や観察が披露されており，この章が一番生き生きしている．最後に観察の手引きと，日本で普通にみられるゴールのリストがあり，45科98種類の植物があげられている．この数は寄主が研究されたものに限られているので，実際にはもっと多いだろう．本書の知識を身につけておけば，野外で「虫こぶだ…。」でおしまいにする前に，いくばくかの観察をつけ加えることができるので，自然に対する理解をより深めることができるだろう．野外でよく出会う食痕についても，こういう解説書がほしい．巻末に用語解説，参考文献，索引がついている．

（金井弘夫）

□西口親雄：**森のシナリオ，写真物語・森の生態系**　148 pp.　1996.　八坂書房．￥2,500.

森林動物を専攻した著者が，永年の演習林勤務の間にものした写真，スケッチ，観察記，エッセイである．図鑑や解説書ではなく，どの頁を開いてもよい．なにげなく目にする自然現象について，著者の蘊蓄を分けてもらえる．自然はそういう予備知識の有無で，たいそう違ったものに見えるものだ．書名よりずっとくだけだ内容で，一般読者にも十分すすめられる本である．

（金井弘夫）

□岩槻邦男：**シダ植物の自然史**　259pp.　1996. 東京大学出版会．￥3,502.

定年をむかえた著者の研究回顧の書であるが，そこらの回顧録とはかなり様子がちがう．誰もが自分の足跡を肯定的に書くのは当然だが，そのときどきの自分や他人の業績が，ささいなことまで実に有機的に関連づけられ，強く言い切る口調で一貫しているので，まるでこれ以外にとる道は無かったと思わせるほどだ．著者がかかわったシダ植物について，フロラ，形態，生活史の研究からはじまって，最近の**DNA**による系統解析にいたるまで，世界の情勢も取り入れながら，「生きているとはどういうことか」（このことばは繰り返し登場する）を追求した過程がいきいきと描かれ

ている．現役の人の名前もどんどん出てくる．というより，そういう人達の業績を積極的に評価紹介するものとなっている．著者が意識的にこういう書き方を選んだことが，序文やあとがきにうかがわれる．これからどういう姿勢で研究を進めるかを決めようとする人達におすすめしたい．そして同年代の私にとっては，我が計画性のなさをあらためて認識させる本である．（金井弘夫）

□橋本光政：**兵庫県の樹木誌**　678 pp.　1995. 兵庫県林務課.　¥12,000.

兵庫県で行われた全国植樹祭の記念出版で，カラー図版372頁，本文・索引306頁より成る．図版にはほとんどすべての種類の花，果実が示され，樹皮・標本・線画・拡大写真も必要に応じて添えられている．本文はすべての種類に同じスペースを割り当て，記述は比較的簡単であるが，近頃は図鑑類が豊富にあるので，ここに植物のくわしい説明がなくてもどうということはないだろう．これと共に図版の写真と証拠標本のデータが記されている．編者が創設にたずさわった兵庫県立人と自然の博物館所蔵の標本が大部分である．研究史物語の章では兵庫県フロラに関する報文が，年代順に57頁にわたって論評されている．ここで注目すべきは，現在の知識にてらして誤認，不明と思われる記録が一々指摘されていることである．662頁にも兵庫県植物目録（1971年）について同じ指摘が行われている．先輩の業績を批判することはなかなかできるものではなく，誤認が周知のことであっても積極的に否定訂正することはまずない．その結果一度記録された誤りがいつまでも生き続け，分布記録とくに分布図に蓄積されてゆくのが現状である．最近のようにデータベース化が進むと，一度記録されたレコードを否定する手段がない．単に削除するだけでは，あとから文献記録に基づいて復活されてしまうので，はっきりした「否定レコード」というものが必要だと私は考えている．それにはこのような正誤の公表が，最も有力なよりどころとなるだろう．やりにくいことをなさった編者に敬意を表する．同様なことは，大村敏朗氏と井波一雄氏によって，新しい出版物について厳しく行われているが，私信によるものであるため周知されないのは惜しい．テキストをパソコンで利用するため，フロッピーディスクが2枚ついている．これは単にテキストを読む以外に，標本のデータを抽出することにも利用できるが，まだ抽出に便利な仕様ではなさそうである．また写真データも標本とは別の存在情報なので，標本と同様なスタイルに揃えるのがよいと思う．入手希望者は下記へ連絡されるとよい．670　姫路市田寺東町4-12-10　橋本光政．送料は近畿圏¥830，圏外¥1,030である．（金井弘夫）

□石澤　進：**ユキツバキを指標とした植物分布**　228 pp.　1996. 学会出版センター．¥9,500.

1980年に始まった新潟県の植物同好じねんじょ会による新潟県植物分布図集は，すでに16集に達し，県単位の分布図集として抜群の出来映えと，その中に挿入された会員によるさまざまな植物地理学的論説によって異彩を放っている．この事業の推進者である著者が独自の手法で，新潟県フロラを特徴づける日本海要素植物のエッセンスをまとめたのが本書である．典型的な日本海要素植物としてのユキツバキを基に，100種の水平垂直分布をメッシュ法によって数値的に比較した結果，分布型の異なる6群を判別している．メッシュシステムによる植物分布図は今や当たり前であるが，そういうシステムをとる理由は単なる表現上作図上の便宜のためだけではない．分布を数値化することによって，目分量ではない植物地理学的検討を可能にすることに意義がある．これは既に堀川芳雄氏が試みたことではあるが，本書によってより精密な処理の新しい方法が提示されたことの意義は大きい．これを足場に，それぞれの植物群の生理生態学的研究が進めやすくなり，日本海要素ばかりでなく，日本の植物地理の解明に指針を与えることとなるだろう．（金井弘夫）

□コーナー E. H. J.（大場秀章訳）：**ボタニカルモンキー**　227 pp.　1996. 八坂書房．¥2,400.

植物採集をする猿がいたということは，先輩から聞いていた．国際生物学賞を受けた著者は太平洋戦争の最中，日本に占領されたシンガポール植物園に止まり，敵側である日本の科学者と協力し